「男、突っ走る！」

第2回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内	雅也	（16）	中央高校1年2組生徒
木内	真保	（43）	雅也の母
木内	健次郎	（12）	雅也の弟
門野	賢哉	（16）	中央高校1年2組生徒
木本	駿	（16）	中央高校1年2組生徒
濱口	寧々	（16）	中央高校1年2組生徒
田崎	良樹	（16）	中央高校1年2組生徒
山辺	一磨	（16）	中央高校1年2組生徒
志田	悠喜	（16）	中央高校1年2組生徒
松井	武	（16）	中央高校1年2組生徒
尾形	安代	（52）	中央高校1年2組担任
佐藤	篤	（58）	中央高校1年学年主任
稲森	亨	（57）	中央高校1年2組副担任

1　中央高校・全景（朝）

雨が降っている――。

N「高校に入って初の中間テストも終わり、時節としては梅雨を迎えていました。学校では制服の衣替えが行われていました。しかし、夏服用のズボンはまだ届いていません。まもなく発生から三ヶ月となる東日本大震災の影響で、ズボンの材料の仕入れが間に合っていないというのです。僕たちの日常生活にも、間接的な影響が出ているのだと実感していたのでした」

2　同・1年2組教室

賢哉、瞬、悠喜が話している。

賢哉「あちーな」

瞬「しょうがないさ、もう梅雨なんだから」

悠喜「あれ、木内まだ来てないよな？」

賢哉「あれ、どうしたんだろう」

と、雅也が汗だくになって登校してくる。

雅也「おはよう……」
賢哉「お前どうしたんだよ」
雅也「この雨でしょ。合羽着て自転車乗ってたら、まあ汗がすごくて。しかも、今日寝坊しちゃってさ、何とか遅刻しないように慌てて自転車こいだんだよ。挙句の果てには、反対側から走ってきて車にバシャッて水かけられるし、まあとんだ災難だったわ……」
悠喜「朝から大変だったな」
雅也「ほんとだよ」
と、クラスメイトの一人・松井武（16）が雅也のもとへやってくると、
武「なあ、木内。英語のノート貸してくれん？」
雅也「ああ、良いよ。どうせ今日も松井がそう言ってくるんじゃないかと思ってた」
と、笑うと鞄から英語のノートを取り出し、武に渡す――不服そうな顔の賢哉と悠喜。
雅也「はい、確かに渡したからね」

武「ありがとう」

と、席に戻っていく。

賢哉「なあ。松井のやつ、いつもお前に英語のノートたかってるな」

雅也「(苦笑して)たかってるってそんな言い方……」

悠喜「でもいつも木内の英語のノート借りてるじゃないか。予習忘れてどうしてもっていうなら分かるけど、いつも木内のノートあてにして自分じゃ何にもやらないじゃないか」

雅也「そもそも予習やってこない志田が何を言うか」

悠喜「だから気になるんだよ。俺は別に成績なんて気にしてないから、ちょっと予習忘れたことぐらいどうってことないけどさ、あいつなんて英語の新しい単元が始まるたびに、木内に急かしてるじゃないか」

賢哉「そうだよ。あれじゃまるで、松井のためにお前が先に予習して、それを見せてる

だけじゃないか」

瞬「まあまあ、二人とも」

雅也「俺は別に良いよ。逆に急かしてくれてる人がいて助かってるもん。自分だけだとどうしてもギリギリまでやらなくなって結局夜遅くまで宿題溜めることになるんだもん。だから、ああやって急かしてくれる人がいたほうが良いし、結局俺も予習することになるんだもん、一石二鳥でしょ」

賢哉「そうかなぁ」

雅也、ノートを写している健のほうを見る。

N「彼の名前は松井武。どちらかともなく話すようになったクラスメイトです。あのとおり、毎回出される英語の予習を見事なまでに書き写しています。かどけんたちは、そんな松井を不服に思っているようですが、僕は全然気にしていませんでした。しかし、この英語のノートという存在が、僕にとってこれからの三年間の学校生活の

中で、キーアイテムとなるような重要なものになるとは、この時まだ思ってもいませんでした」

3　同場所（時間経過）

佐藤が室内を回って、生徒たちの英語ノートにチェックスタンプを押している。

佐藤「（回りながら）ＯＫ、ＯＫ」

と、賢哉、雅也、瞬と順番にノートを見ていく佐藤――悠喜のもとに来ると、手が止まる。ノートが空欄である。

佐藤「志田、お前また予習やってないのか」

悠喜「（軽く）はい」

佐藤「成績に影響出ても知らんぞ」

と、言いながら次々にノートチェックをしていく。何も動じていない悠喜を羨ましそうに見ている雅也。

Ｎ「宿題や課題はやって当然、というのが僕の考えですが、志田のように堂々と宿題を

やっていない姿勢が、時に羨ましくも思っていました」

4　同・職員室

安代と佐藤が授業を終えて戻ってくる。

安代「そうですか、志田君が」

佐藤「予習をしてくるのは任意にしていますが、私はその分成績に反映させています。ただ志田の場合、予習もやっていないし、提出物も出さなければ、先月末の中間テストの成績もよくありませんでした」

安代「確かに、あの子は全体的に成績がよくありませんでしたね」

佐藤「志田に限ったことではありませんが、二組はただでさえ男子生徒が多くて手こずることがあるんです。尾形先生も大変かもしれませんけど、今一度宿題や課題の意義、成績が悪いと進級ができないという話をしっかりと伝えてくださいね」

安代「分かりました」

難しい顔の安代である。

5　同・全景（数日後）

N「六月も中旬に入り、いよいよ今月末には一学期の期末テストを控えていました。そんなある日のこと……」

6　同・1年2組教室

雅也が帰る支度をしている――瞬が後ろの席から、

瞬「ねえ、うっちー。現代文のノート貸してくれない？」

雅也「良いよ。（とロッカーへ取りに行き）はい、これ」

瞬「ありがとう」

と、良樹がやってくると、

良樹「木内、情報のノート貸してくれない？」

雅也「良いよ。（と鞄から取り出して）ほい」

良樹「サンキュー」

と、健がやってくると、

健「木内。英語のノート貸してくれない」
雅也「良いよ（と鞄からノートを取り出して渡す）」
と、一磨がやってくると、
一磨「なあ木内。社会のノート見せてくれる？」
雅也「良いよ。ロッカーに入ってるから持ってって」
一磨「分かった、ありがとう」
と、寧々がやってくると、
寧々「ねえ木内。理科のノート借りて良い？」
雅也「良いよ。（と鞄からノートを取り出し渡す）」
寧々「ありがとう」
と、教室後ろの黒板を見る雅也――テストの範囲表が全部書かれている。
雅也「とりあえず国語からやるか」

7　木内家・全景（夜）

8　同・雅也の部屋

雅也が宿題をしている―と、鞄の中を探りだす。

雅也「……あれ？　俺、国語のノート誰に貸したっけ？」

と、携帯電話をかける。

9　門野家・賢哉の部屋

パソコンで競艇の実況を見ている賢哉――と、携帯電話が鳴る。

賢哉「（携帯電話を見て怪訝そうに）木内。（と電話に出ると）はい、どうした？」

雅也の声「ねえ、俺の国語のノートってかどけんに貸したっけ？」

賢哉「え、俺は何も借りてないぞ」

雅也の声「そっかぁ」

賢哉「何だ珍しくそっちから電話かけてくるから、何事かと思ったじゃねえか」

10　木内家・雅也の部屋

携帯電話で話している雅也。

雅也「だって、期末テストが近いんだもん。ちょうど勉強しようと思ってさ、鞄の中見たらノートがないんだもん」

賢哉の声「誰に貸したか覚えてないのか？」

雅也「ちょうど今日、帰りのホームルームが終わってから、何人かいろんなノート貸したんだよね」

賢哉の声「他にもノート貸したのか？」

雅也「うん。だから、今ふと思ったんだけどさ、誰に何のノート貸したのか、思い出せないんだよね」

11　門野家・賢哉の部屋

賢哉「その貸したやつに連絡すれば良いじゃねえか」

雅也の声「けどいやらしいじゃん、一人ずつ国語のノート持ってるかって聞くの。何か催促したみたいでさ」

賢哉「じゃあどうするんだよ？」

雅也の声「とりあえず今日は、保健体育の勉強でもするよ」

12　木内家・雅也の部屋

賢哉の声「お、こんな時間にか？」

雅也「うるさいよ。（と苦笑すると）かどけんも、競艇の実況なんか見てないで、勉強したらどうなの？」

賢哉の声「何で分かるんだよ」

雅也「奥から実況の声丸聞こえだよ」

賢哉の声「マジか……」

雅也「じゃあね、ありがとう。また明日。（と電話を切ると）しゃーない、保健の勉強するか」

と、棚から教科書を出して、読み始める。

13　中央高校・全景（朝）

14　同・1年2組教室

雅也が登校してくる。

雅也「おはよう」

と、席に座ると、後ろの席の瞬がノートを渡す。

瞬「うっちー、これありがとう。助かった」

雅也「ああ。俺、きのしゅんに貸してたんだ。確かに受け取りました」

瞬「何かあったの？」

雅也「昨日の夜ね、勉強しようと思って鞄の中見たの。そしたらさ、国語のノートが無くて、誰に貸したのか思い出せなかったんだよ。いろんなノートをいろんな子に貸しちゃったせいで」

瞬「ああ。確かに昨日いろんな子に渡してたもんね」

雅也「それでさ、かどけんに貸したかもしれないと思って電話したら、そもそもノート貸してなかったんだよ。あいつなんて、呑気に競艇の実況なんて見ちゃってさ。いい加減勉強しろって話だよね」

と、雅也の携帯電話にメールの通知が来る。

雅也「危なッ……携帯、電源切ってなかったわ」

と、携帯電話を開く――メールの受信を確認すると、賢哉からのメールである。

賢哉の声「今日、学校休む。安代に伝えといて。よろしく」

雅也「え、今日かどけん休むんだって」

瞬「多分、バイト入れたんじゃない？」

雅也「バイト？」

瞬「あれ、うっちーに言ってなかったっけ？俺もかどけんも、同じハンバーガー屋でバイトしてるんだよ」

雅也「え、そうなの？」

瞬「かどけんが話してるもんだと思ってた」

雅也「生徒指導部に申請ってしてた？」

瞬「俺はしてない。多分、かどけんもやってないんじゃないかな」

雅也「(小声になって)学校にバレたらどうするの？　無断バイトって、確か謹慎処分になるんじゃなかった？」
瞬「まあ、よっぽど大丈夫でしょ」
と、始業チャイムが鳴り、安代が入ってくる。
安代「おはようございます」
一同「おはようございます」
安代「一点、今日は皆さんに連絡です。男子学級代表の光岡龍二君ですが、しばらく学校を休むことになりました」
ざわつく一同。
悠喜「あいつ、何かやったんですか？」
安代「いずれ皆さんの耳にも入ると思うのでお伝えしますが、生徒指導部に届け出を出さずにアルバイトをしていました。(と言い聞かせるように)アルバイトをする場合は、必ず生徒指導部に届け出を出して許可を得て行ってください。ですが、あくまでも皆さんが優先すべきは学業です。バイト

をしていたから成績が悪くなったとか、提出物をやる暇がなかったというのは言い訳にはなりません。分かりましたね」

一同「……」

安代「良いですね？」

一同「はい」

雅也、瞬のほうへ振り返ると、小声で、

雅也「かどけんもきのしゅんも、今に光岡君みたいになっちゃうよ」

瞬「何でバレたんだろうね」

雅也「そりゃこういうのは、誰かがリークしたか、バイト先に先生と鉢合わせになったか、どっちかでしょ」

瞬「そうだよな」

雅也「かどけんやきのしゅんがアルバイトしてること、他に誰か知ってる人いる？　気をつけないと、生徒指導部にチクられちゃうよ」

瞬「まあ、その時はその時だよ」

雅也「そんな呑気な……謹慎になったら学校

だって来れないし、勉強だって遅れるちゃうんだよ」
瞬「分かってるよ、そんなこと」
雅也「そういえば、謹慎っていつまで何だろう。期間とかあるのかな？」
瞬「どうだったかな。確か、謹慎の間に各教科の課題が出されて、それが終わったら謹慎が解けるらしいよ」
雅也「じゃあ、課題をやらなかったら、その分期間は伸びるってわけだ」
瞬「まあ、そういうことになるだろうね」
雅也「なるほどねぇ……」

15　同・職員室

安代が生徒名簿を難しい顔で見ている――と、稲森が授業から戻ってくる。
稲森「尾形先生、どうされたんです？」
安代「光岡君が謹慎でしょ。彼、学級代表やってますからね、しばらく男子学級代表代理を誰かにお願いしたほうが良いんじゃ

ないかと思って、佐藤先生とも相談してたんですよ」

佐藤、安代の後ろから名簿を除くと、

佐藤「二組は男子が三十人もいますからね。学級代表の光岡がいない間、誰か一人ぐらい学級代表代理を任せられる子がいるんじゃないかと思いましてね」

稲森「しかし、みんなそれぞれに係の仕事がありますからね。元々の自分の係をやりながら、学級代表の代理をやるとなると、みんな首を縦には振ってくれないんじゃないですか？」

安代「そうなんです。私は、そこが気がかりなんですよ。年頃の子でしょ、面倒くさがってみんなやりたがらないんじゃないかと思って」

佐藤「（名簿を見て）あ、木内はどうです？」

安代「木内君ですか？」

佐藤「彼、うちの女房が勤務してる中学校出身で、結構仲が良かったって聞いてます。

なかなかあの年代だと五十過ぎのベテラン教師と仲良くなるなんてありませんからね、大人受けが良い子なんじゃないですか」

稲森「確かに木内君なら、成績は可もなく不可もなしというところですが、普段の授業態度は真面目だし、結構クラスの子とも話しているみたいですから、一度ダメ元でも相談してみたらどうですか？」

安代「そうですねぇ（と名簿を見つめる）」

16　同・会議室

ノック音がし、雅也が入ってくる。

雅也「失礼します」

と、安代、稲森、佐藤が座っている。

雅也「（一瞬ひるむと）先生方お揃いで、何事でしょうか」

佐藤「まあ、座りなさい」

雅也「はい……」

雅也、緊張気味に椅子に座る。

安代「実は木内君に相談があってね」
雅也「はい」
安代「光岡君が謹慎でいない間、木内君に学級代表代理をお願いしたいの」
雅也「え、学級代表代理？　僕がですか？」
稲森「先生方と話して、木内君はどうかなと思って」
雅也「いやいやいやいや……もっとふさわしい子がいると思うんですけどね。確かに、中学校の時は部活の部長をやったり、生徒議会担当のクラス議員とかやってましたよ。けど、今のあのメンツの中で僕が学級代表代理っていうのは……」
安代「確かに、今はクラス議員やってもらってるから、自分の役割だってあると思う。それとの掛け持ちは大変かもしれないけど、何とかお願いできないかしら」
雅也、安代たちの顔色を伺う――雅也、安代たちの険しいような真剣な眼力を見つめる。

雅也「分かりました……先生方がそうおっしゃるなら」

安代「ありがとう。私もできるだけフォローには入るから」

雅也「お願いします」

真剣な表情の雅也である。

N「いきなり安代先生に呼ばれ、僕はてっきりかどけんときのしゅんの無断バイトがバレて、そのことについて事情聴取されるのではないかという不安がありました。ですが、呼ばれた理由はまさかの学級代表代理になってほしいというお願い。思いがけない出来事に僕は混乱をしていましたが、正直かどけんやきのしゅんの要件ではなかったことに対する安堵の気持ちもあったのでした」

つづく